

## 72 中日疫病史における伝染説提唱の先

覚者

——呉有性と橋本伯寿

邵 沛

中日両国医学発展の歴史において、各種の伝染病は人類の健康に対する危害がもつとも大きく、死亡した人数の多い重大な疾病である。呉有性と橋本伯寿は疫病の伝染性について科学的な立場からいち早く注目しており、その知見に基く予防法の啓蒙をめざした者として両国医学の歴史に名を残す人物であるといえよう。

ここでは両者の主著『温疫論』と『断毒論』をとりあげ、そこに展開されている衛生、予防法を分析した。二人とも旧来の医説に対する革命的学説を述べている。特に痘瘡を含む伝染病予防によって避けることができるという可能性を示したことは、偉大な功績であるといえることができる。

一、呉有性は一六四二年『温疫論』を著わしたが、そのでの主な貢献は、

1、伝染病因学の認識 彼は雑氣論を主張している。雑氣と言うのは一種の形がなく、声がなく、臭いがない物質である、細菌学がおこる前に、この仮説は注目すべきものである。雑氣は病気を発症させ、且つ伝染性、流行性、散発性がある。この学説は、当時、伝染病に対する予防と診断に積極的な役割を果たしていた。異なる雑氣が異なる病気を引き起こす。痘瘡と疔瘡など外科化膿性感染の病因を雑氣としている。この見方は、イギリス学者リスターが一八六七年初めて傷口の感染性化膿症と内科伝染病の中には微生物で引き起こされる病気があることを発見することより二百年以前のことであった。

2、呉氏は伝染病の分類に常疫と疫病の概念を主張し、雑氣の中に発病力が強く、伝染性が大きいのを疫氣、癘疫氣、戾氣といい、伝染病の流行は季節的、周期的であることを主張した。戾氣によって発する伝染病は大流行と散発の二種類を認めている。

3、伝染する方式として、空気伝播をあげると同時に、

患者との接触による伝播を認めている。この説は後世の予防隔離、空気消毒へと発展した。

二、橋本伯寿は一八一〇年『断毒論』を、翌年『国字断毒論』を著わして、痘瘡、麻疹、梅毒、疥癬は人より人に感染する伝染病であることを主張した。彼の観点は、

1、痘瘡は伝染病である。従来唱えられてきた胎毒または天行時疫に因るものではないとした、その「伝染に三あり、第一は痘瘡病者に近よりて熱氣鼻に入る時は、仮令其臭はしらずとも必ず毒気にかぶるなり。第二は痘瘡病者の玩物すべて病中寝所に在りし物を手に触れても伝染す。第三は痘瘡家の食物にて伝染す」と痘瘡を一種の接触伝染病として、また鼻からも伝染(空気伝染)する疾病であると述べる。

2、痘瘡の蔓延の原因は人口の密集にあるとしている。疫病流行時には群集を避ける、すなわち祭りへの参加、劇場、見物、銭湯での入浴などは禁物であるという注意である。また、痘瘡の急速な流行の一因には痘瘡児を抱く乞食の存在があげられるという。これは伝染予防

の観点から今日でも否定しえない注意事項を示している。

3、断毒の方法として推奨する合理的対抗策は隔離と回避である。伝染病に罹患したとき周囲へ広がるのを防ぐために一般社会生活環境からしばらく切り離して生活させる必要がある。

呉有性と橋本伯寿は、それぞれ十七世紀と十九世紀の中国と日本において、歴史上異なる時期に非常に近似した医学思想を構築し、実証的精神と実践思想を強調し、微生物の発見より早く「戾氣」、「雜氣」と「熱氣」「毒氣」を創見した。伝染病及び予防隔離法についての見解は、医学発展史にかなり重要な貢献をした。

本稿に記すにあたり、酒井シヅ教授にご指導いただいたことを深謝します。

(順天堂大学医学部医史学研究室／深圳市中心医院)